

# New Products Review

これは買い!?  
気になる新製品をいち早くテストする!



ウェブページの更新をチェック&ダウンロード  
**TIERRA HIGHLIGHTS2**

独自の圧縮技術を採用したDSU内蔵TAボード  
**SP128DSU-ISA**



プラグ&プレイに対応したDSUなしの内蔵型TA  
**Aterm IB55 Pro**



遂に普及型デジタルカメラもメガピクセルに突入!  
**CAMEDIA C-1400L**

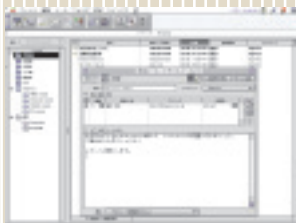
CFカード対応。レスポンスや画質も向上した多機能デジカメ  
**QV-700**



Win & Mac 対応の電子メールのデータベースソフト  
**++Mail Ver.1.0**



階層フォルダー&シングルデータベースをサポート  
**クラリスメール 2.0**



ウェブページの欲しい部分だけ整理 / 保存できる  
**ホームページ  
スクラップブック Ver.1.0**



ウェブページの更新をチェック&amp;ダウンロード

## TIERRA HIGHLIGHTS2

Check!

更新箇所がマーカー表示され分かりやすい  
接続時刻も自由に設定できる。

開発元	Tierra Communications 社
発売元	株式会社イー・アンド・イー
価格	店頭販売キャンペーン価格 9,800 円 (初回限定3000本) オンライン販売価格4,980 円
問い合わせ	03-3364-5650
動作環境	ウィンドウズ95/NT4.0が動作する ハードディスク空き容量10Mバイト 以上のマシン
URL	<a href="http://www.e-e.co.jp/soft/hl/">http://www.e-e.co.jp/soft/hl/</a>

登録したウェブページの中から更新されたウェブページを探してダウンロードするユーティリティソフト。マイクロソフトのWWWブラウザ、インターネットエクスプローラ4.0に搭載された「購読機能」を独立させ、さらに機能を追加したような製品だ。

WWWブラウザはどちらでもOK

HIGHLIGHTS2は、インターネットエクスプローラだけでなく、ネットスケープナビゲーターでも利用できる。インターネットを利用可能な環境にあるウィンドウズ95かNT、空きハードディスク10Mバイト以上が動作に必要で、ソフトはCD-ROMで提供される。

## 試用レポート

## ① 便利な更新チェック&amp;自動巡回機能

HIGHLIGHTS2をインストールするとデスクトップの右端が左端にコントロールバーが表示される。このコントロールバーでHIGHLIGHTS2の設定ができ、状況が表示される。コントロールバーの大部分が購読登録したウェブページのラベルである。これは、購読登録したウェブページ(アシスタントと呼ばれる)を示す文字どおりのラベルで、その横に並ぶボタン状の表示がタグだ。タグはそのアシスタントの状態を表すもので、「更新されてない」、「更新された」、「確認中」、「確認中に更新箇所を見つけ、ダウンロードを行っている」などの動作が分かる。

アシスタントには、「ラベル名」と「対象となるウェブページのURL」を設定すればよい。さらにオプションでモニターする優先度を変更したり、モニターする時間帯や周期の設定が行なえる。指定時刻になると、インターネットに接続し、アシスタント登録のしてあるウェブページの内容が変更されているかを確認し、更新されているとそのページをダウンロードし、更新さ

れたウェブページがあることを知らせてくれる。ダウンロードしたページのHTMLは自動編集されているので、オフラインでも画像のリンクなどの問題はない。

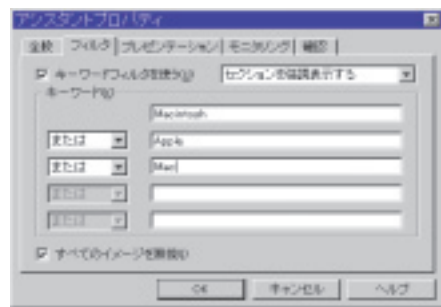
## ② 更新箇所はマーカー表示

しかし、この製品の特徴はここからだ。インターネットエクスプローラの購読などでは、更新ページをパソコンのハードディスクにダウンロードしてオフラインで閲覧できるが、更新前との差は、見比べないと分からない。HIGHLIGHTS2の場合は、どこが更新前と変わったのかという内容の違いが一目で分かる。1ページに数百行も文章が書かれてると、更新されていても、何が変わったか分からないこともあるはずだ。HIGHLIGHTS2では、変更された部分を指定カラーでハイライト表示し、容易に変更箇所が分かる機能を備えている。ハイライト表示のHTMLをサポートしていないブラウザでは、変更部分をボイダー表示にすることもできる。これにより、文章単位で更新箇所が確認できるようになった。

アシスタントに登録するウェブページは、ブラウザの購読機能のようにハイパーリンクを複数回たどりながら更新を確認する必要はないが、対象となるページを1ページずつ登録する手間が必要だ。インターネットエクスプローラの購読機能を使っていると、変わっている所が分からない更新ページにも出会う。そうすると、間違い探しゲームのように、食い入るように古いページと比較するか、あきらめるしかなかった。そんな、かゆいところに手が届く機能を持った製品だ。操作が単純で、機能が分かりやすいというシンプルさも好感が持てる。



画面左側がコントロールバー。更新を見つけた場合などは、アシスタント(個々のウェブページ名)の右側にあるボックスに表示される。



テキストのフィルタリング機能を使えば、すべての更新部分の中から、関心のある部分だけをチェックすることもできる。

③ チェックするページがたくさんある人に  
ハイドボタンでコントロールバーを隠し、タスクバー表示にすることも可能なので、ノートパソコンのように画面サイズが小さくても不便を感じさせない。更新ページを1ページずつ登録する手間が一番の欠点だろうが、これまで紹介してきた便利な機能は、ウェブページの更新箇所が気になる人にとっては、その手間をかける価値が十分にあるはずだ。ウェブページの更新に注意を払う人にはうってつけのソフトである。

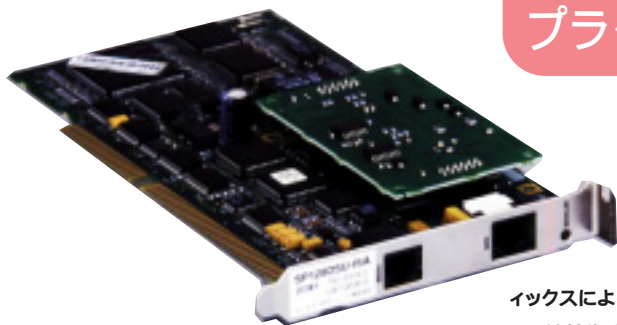
(菊地宏明)

# 独自の圧縮技術を採用したDSU内蔵のTAボード SP128DSU-ISA

## Check!

### 高速シリアルボードが不要 独自技術でファイルを圧縮転送 DSUを内蔵 プラグ&プレイには非対応

発売元	US ロボティクス株式会社
価格	49,800円
問い合わせ	03-5402-6211
URL	<a href="http://www.usrobotics.co.jp/products/sp128di.htm">http://www.usrobotics.co.jp/products/sp128di.htm</a>



以前は一部のルーターなどにしか搭載されていなかったデータの圧縮機能が、最近TAでも使えるようになった。USロボティクスによると、SP128 DSU-ISAでは独自の圧縮技術「Turbo PPP」によって最高転送速度512Kbps（理論値）を実現したという。

イーは、TAの設定だけでなく、接続状態を細かく表示する機能もあり、動作が分かりにくい内蔵型TAの欠点を補っている。接続のログもとれるので、うまく動作しないときの解析もスムーズだ。なお、「ISDN マネージャ」はウィンドウズ95のみの対応だ。



#### Turbo-PPPとASCENDの圧縮

Turbo PPPはUSロボティクスの独自圧縮技術で、転送するファイルを圧縮することで転送量を増やし、転送速度を上げることができるものだ。この技術はASEND、Stac、Microsoftの圧縮をサポートしているため、SP128 DSU-ISA同士の接続でももちろん、それらの圧縮をサポートするプロバイダーでもデータの圧縮転送が利用できる。ただ、最高転送速度の512Kbpsは理論値であり、通常使用では出ない。

#### 試用レポート

##### ① デバイスの競合に注意

プラグ&プレイには対応していないので、インストール時は他のハードウェアと競合しないように注意する必要があるが、マニュアルを見ながら進めれば問題なくできるだろう。ISAボードをたくさん使っているときは、事前に空きを確認しておいたほうがいい。

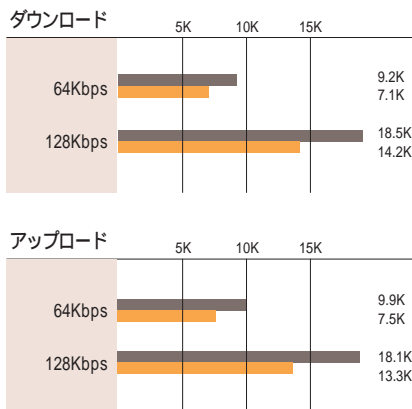
リムネットのアクセスポイントから接続してFTPの転送速度を測定した。左の図の「詳細」ウィンドウに表示されているように、128KbpsでASCENDの圧縮が有効になっているのが分かる。実際、圧縮効果の現れやすいテキストファイルではバイナリーに比べて30%以上速く、理論値の512Kbps（64Kバイト/秒）には及ばないものの、最高18.8Kバイト/秒をマークした。これは128Kbpsで圧縮がないときの理論的な限界値16Kバイト/秒を上回る値だ。

##### ② 高速通信を利用したい人にはおすすめ

やはり、SP128 DSU-ISAは何とんでもそのスピードがウリだ。SP128 DSU-ISA同士でつなぐ場合はもちろん、高速で通信したいパワーユーザーにもおすすめできるTAだ。ただし、インターネットの場合は、画像ファイルなどのバイナリーデータも多いので、期待のしすぎは禁物だろう。（梅垣まさひろ）

FTPによるファイル転送速度（バイト/秒）

■ テキストファイル ■ バイナリーファイル



リムネット東京第3ドメインのユーザーホストを利用してテストしたところ、ASCENDの圧縮がかかった。テストには、ペンティアムPro 180MHzのCPUに64Mバイトのメモリーを搭載したウィンドウズマシンを使用。FTPコマンドで、テキストとバイナリーの2種類のファイルをそれぞれ5回転送し、その平均をとった。使用したファイルは、LHAで圧縮するとそれぞれ、42.1%（テキスト）、98.5%（バイナリー）に圧縮されるファイル。したがってこのバイナリーファイルは、ほとんど圧縮効果が期待できないといえるだろう。

#### ISAバスでDSU内蔵

ボードはISAバスで、アナログポート1つとISDN回線をつなぐRJ11ポートが付いており、DSUも内蔵している。もちろん高速シリアルボードも必要ない。ただし、S/T端子がないので、TAの増設はできない。もし、すでにDSU内蔵型のTAや、DSUを持っているのなら、DSUを内蔵しないSP128 ST-ISAをおすすめする。SP128 ST-ISAにはS/T端子があり、基本的なスペックはSP128 DSU-ISAと同じだ。

アナログポートは、コンピュータの電源が入っていないと使えないので、電話をつなぐというよりもモデムをつないで使うためのものと考えたほうがいいだろう。

#### 内部動作が一目で分かる

「ISDN マネージャ」という設定ユーティリティ

# プラグ&プレイに対応したDSUなしのTAボード Aterm IB55 Pro

## Check!

プラグ&プレイに対応  
高速シリアルボードが不要  
CPUを搭載せず低価格化  
Aterm独自の便利な機能を備える

NECのAterm IB55 Proが新しくなった。IB55は、ビジネス用途では広く使われてきた内蔵型のTAだが、他のAtermシリーズのようなエンドユーザー向けの豊富な機能が無いなどの理由から、あまり一般的に使われるボードではなかった。しかし今、これらのスペックと機能を備えたIB55 Proが登場した。

### 充実したスペックと機能

AtermシリーズでおなじみのリソースBOD(通話などの必要に応じて回線数を調整)、スルーポートBOD(データ流量によって回線数を調整)の機能をサポートし、発信側に通信料がかからないステルスコールバックも追加された。

また、BIGLOBEへのメール着信が、BIGLOBEにつながなくても確認できる「メール着信通知」機能、Atermシリーズに漢字50文字までのメッセージが送信できるUIメール機能などは、他のTAでは利用できないAtermシリーズだけのオリジナルの機能だ。また、特に面白いのが、UIメールサーバー(お試版)だ。これを使うと、届いたメールの先頭100文字を無条件に遠隔地のAtermシリーズのTAに届けたり、電子メールのSubjectやFromのヘッダーに特定の文字が含まれていたときに、同様に100文字以内で遠隔地に自動的に送信する機能などが使える。たとえば、会社のAterm IB55 ProでUIメールサーバーを動かしておき、自宅のTAで通知を受けるといった使い方をすれば、欲しいメールが来たことを確認してから、メールを読むために接続すればいいので便利だ。本社と小さな営業所、会社と自宅などをつなぐときに使うのにも向いている。

ウィンドウズNT4.0で本領を発揮

ウィンドウズNTでは、剥離通信とよばれる

ISDNの2回線をそれぞれ別々の用途で使える機能が利用できる。たとえば、片方のBチャンネルでプロバイダーにダイヤルアップした状態で、もう1つのチャンネルでRASを受けたり、別々の相手にRAS接続することもできる。普通、シリアルポートに接続する外付けタイプでは、ISDNの2回線を別々に使うことができないから、1台のマシンで同時に2回線使いたい場合は、TAを2台用意する必要があった。また、Aterm IB55 Proでは、前モデルでウィンドウズNTには未対応だったUIメール、回線テストユーティリティ、非同期57.6Kbps通信などの機能が新たに使えるようになった。

### 試用レポート

#### ① インストールはまだ難しい

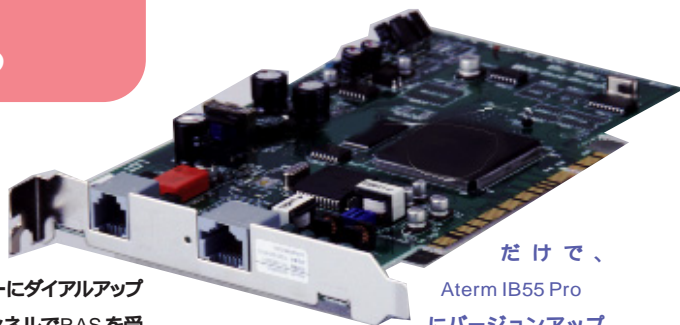
ウィンドウズ95に本ボードをインストールしてみた。今回、新たに「インストールアシスタント」というセットアップユーティリティが付属するようになったが(ウィンドウズ95のみ)インストール作業は簡単でない。ボードの増設に手慣れた人でも、マニュアルを細かく読んでインストール作業を始めたほうがいい。また、ボードをインストールする前に、付属のISDNアクセラレータパックを入れておかないと、あとの作業が面倒になるので気を付けてほしい。インストール作業自体は、マニュアルどおりにやればスムーズに進むはずだ。

#### ② 高速シリアルボードが必要ない

Aterm IB55 Proユーザーに朗報だ。NECのAterm Station(<http://www1.meshnet.or.jp/aterm/>)からドライバーをダウンロードする



発売元	日本電気株式会社(NEC)
価格	24,800円(本体とAterm IT25 DSUとS点ユニットのセットは59,800円)
問い合わせ	0120-36-1138
URL	<a href="http://www1.meshnet.or.jp/aterm/product/ib55pro2/ib55pro2.htm">http://www1.meshnet.or.jp/aterm/product/ib55pro2/ib55pro2.htm</a>



だけで、  
Aterm IB55 Pro  
にバージョンアップ

ができるのだ。ハードウェアはそのままでドライバーの入れ替えだけでOKなので、ぜひとも利用してもらいたい。

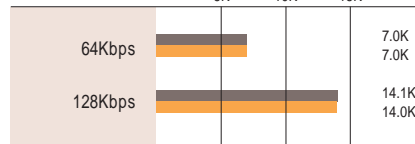
内蔵型のTAはインストールが難しく、外付け型に比べると機能の見劣りは否めないが、128Kbps通信を利用するのに外付けTAのように別途高速シリアルボードを必要とせず、気軽に高速通信が利用できる点は捨て難い魅力だ。今回もFTPによるファイル転送速度をテストしてみたので、そちらのグラフもご覧いただきたい。

(梅垣まさひろ)

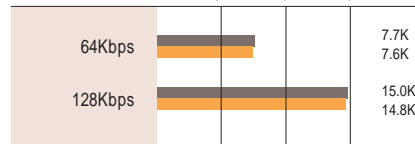
#### FTPによるファイル転送速度(バイト/秒)

■ テキストファイル ■ バイナリファイル

#### ダウンロード



#### アップロード



リムネット東京第3ドメインのユーザーホストを利用してテストした。テストには、ペンティアムPro 180MHzのCPUに64Mバイトのメモリーを搭載したウィンドウズマシンを使用。FTPコマンドで、テキストとバイナリの2種類のファイルをそれぞれ5回転送し、その平均をとった。使用したファイルは、LHAで圧縮するとそれぞれ、42.1%(テキスト)、98.5%(バイナリ)に圧縮されるファイル。したがってこのバイナリファイルは、ほとんど圧縮効果が期待できないといえるだろう。

ついに普及型デジカメもメガピクセルに突入!

## CAMEDIA C-1400L

Check!

2/3 インチ141万画素 CCDを採用  
36~110mm 相当の3倍ズーム  
L型フォルムで安定したホールディング性  
パララックスのない一眼レフ方式のファインダー  
この画質と機能で128,000円の普及価格

開発元	オリンパス光学工業株式会社
価格	128,000円
問い合わせ	0426-42-7499
付属品	単3アルカリ電池4本、リチウムコイン電池、スマートメディア(4M)
オプション	ACアダプター 4,500円 接続キット10,000円(画像編集ソフト付き)

URL <http://www.olympus.co.jp/LineUp/Digicamera/c1400l.html>



光学3倍ズームを内蔵した一眼レフタイプのデジカメだ。従来のコンパクトカメラ型のお手軽デジカメとはひと味違ったスタイル。



1.8型 TFT 液晶モニターを備えるが、これは完全に再生専用で、ファインダーとしては利用できない。



ズーム全域で30センチまで近寄れるので、従来のCAMEDIAシリーズよりもマクロに強くなった。

2/3 インチ141万画素 CCDを搭載したオリンパス CAMEDIA C-1400L の発売によって、普及型デジタルカメラもいよいよメガピクセルの世界に突入した。35mm カメラ換算で36~110mm 相当の光学3倍ズームを内蔵した一眼レフ方式のデジタルカメラで、これまでのVGA 画素クラスのデジカメの4倍以上の情報量を記録できる。

フィルムの持つ記録能力にはまだまだ及ばないとはいえ、ポストカードサイズまでなら、まさに写真並みのクオリティーでプリントできる。1年前なら100万円以上投資しなければ手に入らなかった高精細な画質が、わずか128,000円で手に入るようになったのだ。

普及型デジカメもメガピクセルの時代に今年はメガピクセルのデジカメが普及価格で登場すると噂されていたが、遂にその日がやってきた。10月10日発売のオリンパスC-1400Lは、2/3インチ141万画素という1年前なら100万円以上する業務用デジカメにしか使われていなかった高品質のCCD採用しながらも128,000円という普及価格を実現。これまでの常識をはるかに超えた1,280×1,024ピクセルという高精細な画像を撮影できるのが特長だ。

現在発売されている普及型デジカメは、いわゆるコンパクトカメラタイプがほとんどだが、このC-1400Lは、レンズ交換こそできないものの一眼レフ方式のデジカメだ。レンズで捉えた像を直接ファインダーで確認できるので、近接撮

影時でも狙った構図で撮影できる。また、36~110mm 相当の光学3倍ズームレンズを内蔵しているため、ちょっとした望遠撮影もお手もの。ピント合わせはコントラスト検出方式のCCD AF(オートフォーカス)で、シャッターボタン半押しでAFが作動する。従来の銀塩カメラを使い慣れた人にも、なんの違和感もなく撮影できるデジカメだ。

一眼レフ方式のファインダーで液晶モニターは再生専用

ボディサイズは少々大きいのが、オリンパス伝統のL字型フォルムで、非常に安定したホールディングが期待できる。背面には1.8型液晶モニターが付いているが、これは完全に再生専用で、ファインダー代わりに利用することはできない。開発者によると、液晶モニターをファインダー代わりにするとホールディングが不安定になるため、あえてこのような仕様にしたという。確かに、その言葉どおり、ストロボを使用するように警告表示が出るような低照度での撮影でも、ブレが少ない。

シャッターを切ると、その直後に背面の液晶モニターに撮影した映像がメモリーに記録されている間、レビュー表示される。ただし、液晶パネルは61,000画素と高精細ではないので、ピンボケやブレのチェックはちょっと無理。液晶モニターで大丈夫だと思っても、パソコンで確認してみると、わずかにブレていたりピンボケ気味だったりすることもある。できれば拡大再生機能が欲しいところだ。

ちなみに書き込み時間は約10秒とちょっと長め。メガピクセルともなれば画像サイズも巨大になるため、どうしても書き込み時間は長くなる。

これを解消するには、キャッシュメモリーを搭載するしかないが、確実にコストに跳ね返るので、現在はこれで満足するしかないだろう。

記録メディアは3.3Vのスマートメディア。ただし、16Mバイト以上のスマートメディアの仕様が開発時点で確定していなかったこともあって、C-1400Lで使用できるのは3.3Vの2Mバイト、4Mバイト、8Mバイトのカードだけだ。同梱の4Mバイトのカードで撮影できる枚数は、HQモードで12枚、SHQモードで4枚と、メガピクセル機だけに相当キビシイ。少なくとも8Mバイトのカードを2~3枚は用意しておきたい。

## 試用レポート

### ① これまでのデジカメの常識をはるかに超えた高画質

C-1400Lは、あまりに本格的にカメラカメラしているので、カメラに不慣れなユーザーは気後れしてしまうかもしれないが、一眼レフ方式なのでマクロ撮影でもファインダーで見えているとおりで、基本的にはシャッターを押すだけでいいので、とにかく被写体を真ん中に入れて、しっかりカメラを構えてシャッターボタンを押すだけで、141万画素の高精細な画像が撮れてしまうのだ。これほどの画質がわずか128,000円のデジカメで実現するとは数か月前には予想だにできなかった。

ただ、室内など薄暗い場所ではピントがなかなか合わなかったり、手ブレしてしまうこともある。特にC-1400Lは2/3インチサイズのCCDを採用しているメガピクセルカメラなので、今までのVGAサイズのデジカメに比べると、わずかなブレやボケも結構シビアに分かる。というより、これまでのデジカメはわずかなブレやボケが判らないほど不鮮明な画像しか撮れなかったとも言えるだろう。

### ① ホームページ作成にも威力を発揮

C-1400Lの画像サイズは1,280 × 1,024ピクセルと、ホームページ作成用にはウルトラオーバースペックかもしれないが、640 × 512ピクセルで記録するSQモードで撮影すれば、これまでになくシャープネスに優れたVGAサイズの画像が撮れるし、1,280 × 1,024ピクセルで撮影したものを320 × 240ピクセルサイズでトリミングすれば、光学3倍ズームと合わせてデジタル12倍相当のズーム効果が得られるわけだ。



これだけ大きく伸ばしても画像の粗さを感じさせない。業務用途にも通用する高精度な画像だ。

もちろん、1,280 × 1,024ピクセルの画像は目を疑うほどに高精細で美しいので、原寸でトリミングしても十分観賞に堪えられる。カラーネガフィルムを1200dpiクラスのフィルムスキャナーでスキャンするより、銀塩フィルムの粒状がない分、クリアな感じだ。

また、オートホワイトバランスが超強力で、蛍光灯や電灯光下でも色カブリせずクリアに撮影できる。ただ、その副作用で夕焼けさえも青くなってしまうのはご愛敬。写真のような光の色を活かした撮影はちょっと期待できないので、あとでレタッチで演出するしかない。

デジタルカメラの画質は、単にCCDの画素数だけでは決まらないが、オリンパスC-1400Lは141万画素CCDの能力をほぼフルに引き出しているといえる。前述のオートホワイトバランスが強力すぎて夕焼けが青く写ってしまうなど、表現するデジカメとしての問題点は残っているが、記録するデジカメとしては、予想をはるかに上回る出来映えだ。

### ① 撮影が済んだら電源を切るクセをつけよう

気になるのは電池の持ちが非常に悪いこと。カタログスペックでは100枚以上撮影できることになっているが、実際にはカード1~2枚撮影しただけで電池がなくなってしまう。というのは、C-1400Lは5分経つと自動的に電源がOFFになるものの、それまではずっと露出計などで電池を消耗し続けている。したがって、撮影が終わ



多少、シャドー部分が暗くなっているが、ハイライトからシャドーまで非常になめらかな画像だ。露出も的確でバッチリ。

ったら、速やかに電源をOFFにするクセをつけないと、ホントに電池がアッという間になくなってしまふのだ。

最後に、ダイレクトプリントについても触れておこう。C-1400Lと同時に発売されたP-300という昇華型プリンターを使えば、パソコンを使わずにプリント出力できる。このP-300は306dpiの解像度を持つ昇華型プリンターで、C-1400Lの141万画素をフルに再現できるし、独自のカラーマッチングにより、パソコンを経由してプリントアウトするよりも鮮やかに明るいプリントが得られるのが特長だ。(伊達淳一)

# CFカード対応。レスポンスや画質も向上した多機能デジカメ QV-700

## Check!

CFカードに対応しストロボも搭載  
画像の記録時間が約1秒と短い  
全体の動作レスポンスも速い  
従来のQVシリーズよりも色再現が鮮やかに  
便利なパノラマ撮影機能

発売元	カシオ計算機株式会社
価格	75,000円
問い合わせ	03-3347-4811
付属品	コンパクトフラッシュカード(2M)、 専用ビデオケーブル、 単3アルカリ電池4本
オプション	ACアダプター 4,000円 パソコンリンクソフトウェア Win/Mac版各6,000円 パソコンリンクケーブル 4,800円

URL <http://www.casio.co.jp/personal/dcamera/qv700spec.html>



パッと見た目のスタイルはQV-100のものだが、実際にはエプソンCP-500並の大きさだ。



背面の液晶モニターは従来の1.8型でなく2.5型。レンズ部にストロボが付いているので、自分撮りにもストロボが使える。



最短撮影距離で名刺を接写。絞りが自動式になったのは便利だが、意図的に絞ってピントを深くするテクは使えなくなった。

デジタルカメラブームのきっかけとなったカシオQV-10。現在はQVデジタルシリーズとしてラインナップが拡充されつつあるが、その最上位モデルに位置付けられるのがQV-700だ。QVデジタル初のメモリーカード記録、ストロボ搭載モデルで、画像記録が極めて高速なのが特長だ。全体のレスポンスや画質も向上しており、すべてを紹介しきれないほど盛りだくさんの撮影機能を誇る。VGA画素クラスのデジカメとしては、少し高めの価格とポディーサイズが気になるが、QVの最上位機種にふさわしいスペックと実力を持っている機種だ。

### QV デジタル初のCFカード採用

カシオQV-700は、QVデジタル初のメモリーカード記録モデルで、CF(コンパクトフラッシュ)カードを記録メディアとして採用。標準で2MバイトのCFカードが同梱されていて、FINEで約14枚、NORMALで26枚、ECONOMYで47枚以上の撮影が行える。各モードとも画像サイズは640×480ピクセルで、圧縮率の違いにより撮影枚数が変化する。

撮影後に、FINEからNORMAL、NORMALからECONOMYへコンバートする機能も搭載されているので、メモリーの残り容量が少なくなってきたときには、優先順位の低いカットから圧縮率の高いECONOMYモードで記録し直すことで、撮影枚数を増やすことができる。予備カードを持っていない人には非常に便利で実用的な機能だ。

### QV-200よりも一回り大きくなった筐体

QV-700の製品写真を見ると丸みを帯びたQV-200といった感じだが、実際にはオリンパスC-800LやエプソンCP-500とほとんど同じポディーサイズだ。背面の液晶モニターも1.8インチから2.5インチへとサイズアップしているが、2.5インチ液晶モニターを搭載したからポディーが大きくなったというより、CFカードやストロボを追加することでポディーが肥大するのなら、ついでに液晶モニターも2.5インチにしてしまおうといった感じだ。

しかし、デザインの基本コンセプトはQV-10のままであり、従来のQVシリーズで好評のレンズ部回転機構や露出補正、拡大再生機能、プロテクト画像の非表示機能など、QVシリーズならではの使いやすさはしっかり受け継がれている。

さらに、QV-700には、他のデジカメにはないようなユニークな機能がたくさん搭載されている。QV-200で登場した画像合成、タイトル・イラスト合成、特殊効果編集(モノクロ、セピア、ヌーボー)をはじめ、撮影した画像をフォルダーごとに分類して記録する機能、シャッターを押した前後を0.05秒間隔で4コマ連続撮影するタイムショット撮影、シャッターを押し続けている間1秒間隔で撮影する連続撮影、

設定した時刻に自動的に撮影するタイマー撮影、一定間隔で複数枚数撮影するインターバル撮影、パノラマ撮影と、非常に豊富な機能を誇る。

## 試用レポート

### ❶ CFカードへの記録はCAM形式を踏襲

QV-700は記録メディアにCFカードを採用したことで、パソコンへの画像転送もCFカードから直接行えるが、画像記録は従来どおりCAM形式のまま。ただ、CAM形式といっても、基本的にはJPEGフォーマットの一種なので、レタッチソフトによっては拡張子をJPGに変えるだけでそのまま読み込めるものもある。ただし、純正パソコン接続キットのQV-LINKには、画像を表示する際に機種ごとに補正を加えてメリハリを強調するなどのオプションがあるが、レタッチソフトで直接JPEGとして開いた場合はやくすんだ感じの地味な再現となる。

### ❷ わずか1秒と高速な画像記録

特筆すべきはメモリーへの記録時間で、ECONOMYモードならわずか1秒、FINEモードでも2秒程度しかかからない。これはソニーのサイバースhoot並みの軽快さだ。液晶モニターのプレビュー表示も従来よりかなりスムーズになり、再生表示もキビキビとして気持ちがいい。また、絞りが自動になり、いちいち手動で設定し直す必要がなくなったのも快適だ。

レンズは35mmカメラ換算で38mm相当。ピントは固定式で、従来と同様、標準とマクロを手動で切り替える。最短撮影距離は14cmだ。レンズもF2.0と明るく、CCDも良くなったので、色再現や解像感がかなり向上している。コントラストが高い部分のギザギザが結構目立つのが惜しいが、VGA画素クラスのデジカメとしてはマトモな部類だ。

また、QVデジタル初のストロボも内蔵しているので、暗い場所でも大丈夫。しかも、ストロボの光量調節が極めて正確で、デライトシンクローはもちろん、マクロモード撮影時でも露出オーバーにならないのは驚きだ。

色再現や階調については、接続キットの環境設定で、表示の際の画像補正のパラメータを変更すると画質もさまざまに変化するので、好みに合わせて設定を変えてみるといいだろう。



「設定・表示」メニューで、自動コントラストを「する」に、彩度の強調を「弱」にすると、液晶モニターで見た感じにもっとも近くなった。

パノラマモードで撮影した画像を、別売パソコンリンクソフトのSpinパノラマで合成した。つなぎ目が撮影時にわかるので便利だ。



❸ つなぎ目が一目瞭然のパノラマ機能  
数あるQV-700の機能で一番気に入ったのはパノラマ。オリンパスC-820LやC-420Lにも付いている機能だが、QV-700の場合は直前のカットの右端が画面左端にオーバーラップ表示されているので、つなぎ目を確認しながら撮影できるのは非常に便利だ。もちろん、機能が豊富になっても使いにくくは本末転倒だが、そのあたりはさすがカシオだ。アナログ感覚で操作できるダイヤルキーと洗練されたメニュー体系で、非常にスムーズに操作できるのはすばらしい。電源を切っても前回のストロボモードを保持しているあたりも心憎い配慮だ。

### ❹ 実売価格さえこなれば魅力的なモデル

これまでのQVデジタルで好評の機能を継承しつつ、色の悪さやプレビューの遅さといった欠点は改善。待望のCFカードにも対応し、全体の動作もキビキビと良くなった。さらに、2.5



筐体(幅147mm×高さ69mm×奥行き50mm)も従来のQVシリーズと比べるとやや大きくなった。

インチと大型のTFT液晶モニターを搭載し、時計を内蔵したので撮影日時も記録できるようになった。そして、他のデジタルカメラにない豊富な機能も盛り沢山と、非常に魅力的なモデルに仕上がっている。

ただ、75,000円と最近のVGA画素クラスのデジカメとしては割高だし、筐体も大きめ(といってもエプソンCP-500とほとんど同じ大きさなのだが...)。このあたりが消費者に受け入れられるかは微妙なところだろう。個人的には大きさはなんとか許容できる範囲なので、実売価格さえこなれば...と思っている。(伊達淳一)





開発元	株式会社ソフトフロント
価格	12,800円(1ライセンスパック)
問い合わせ	011-736-8330
動作環境	ウィンドウズ95 / NT4.0が動作する 16Mバイト以上のメモリ、 ハードディスク空き容量が10Mバイト 以上のマシン 漢字Talk7.5以上、LC475以上の マッキントッシュで空きメモリ2M バイト以上、ハードディスク空き容量 10Mバイト以上のマシン

URL <http://www.softfront.co.jp/ppmail/index.html>

CD-ROM収録先 CD-ROM[B]

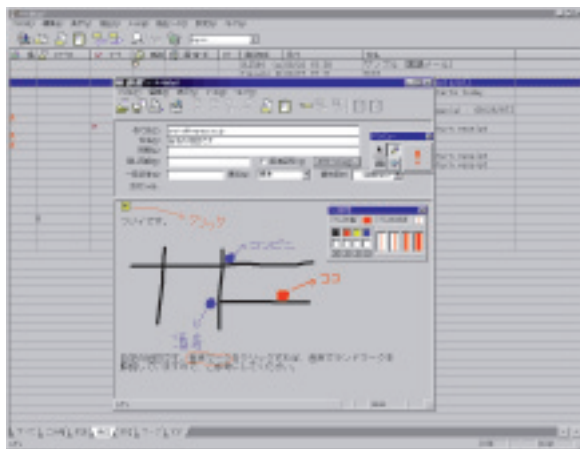
WIN : Trial Win Ppmail PPMAILTRIALWIN

MAC : TRIAL Mac ++MAIL ++Mailお試し版

(PPCもしくは68k)



ウィンドウズ版の操作画面。このように音声やイラスト入りのメールも簡単に作成できる。



++Mail(ぶらぶらめーる)は、「データベース」でメールを一括管理するというコンセプトの基で作られた、新しいタイプのソフトだ。1枚のCD-ROMにウィンドウズ版とマッキントッシュ版が収録され、ともにEudoraからのメールインポートをサポートしている。

マルチユーザー & マルチアカウント対応

++Mailは1台のコンピュータにセットアップするだけで、複数のユーザーがそれぞれのアカウントを使うことができ、使用者ごとにユーザー名とパスワードを登録するので、別の人が使う場合には、その人のユーザー名とパスワードでログインし直す必要がある。

また、++Mailには、通常の電子メールソフトのようなフォルダごとにメールを分類する機能はなく、すべてのメールはデータベースで一括管理される。抽出条件を設定すれば、すべてのメールの中から該当メールが抽出される。設定した条件には名前を付けて、シートタブにすることができる。タブをクリックしてデータ(メール)を抽出するのはデータベースソフトの操作と同じ要領だ。

Win & Mac 対応の電子メールデータベースソフト

# ++Mail Ver.1.0

**Check!**

音声や手書きメッセージが送受信できる  
慣れると使いやすいデータベース管理  
手書きイラストなどのファイルに独自規格が多い  
Eudoraからのインポートをサポート

することができる。また、「一発返信」機能は、メッセージに目を通したあとに「OKです」や「了解」といった返事がほしいメールを出す場合に、あらかじめ送信者が返答メッセージ(「OK」など)を設定しておく、「一発返信」ボタンが作られ、受信者はそのボタンを押すだけで返信メッセージが記入されたメールを送り返すことができる機能だ。これらの機能は、宴会などのイベントの出欠確認にも使えそうだし、プライベートな連絡網にも使うことができそうだ。

## ① 手書き入力や音声にも対応

++Mailは、手書きのイラストや音声メッセージの送受信もできる。手書き入力はペイントソフトの要領で、イラストなどを簡単に作成できるもので、地図などを書いて送ることができる。ただ、++Mailで描く画像ファイルはオリジナル形式なので、ほかのメールソフトで見ることができない。音声ファイルもWAVEなどの一般的なファイル形式ではなく、これもまたオリジナル形式だった。また、半角カタカナを使ってしまった場合は、++Mailが自動で全角カタカナに変換して送信してくれた。

## ① グループで使えばより便利に

++Mailは、オフィスだけでなく、個人がプライベートで使うにも十分な機能を持っているがやはり++Mail特有の便利な機能が活かってくるのはグループで使う場合だろう。むしろグループで使わないと、その実力のすべては発揮できない。なお、本誌付録のCD-ROMに試用版が収録されているので、興味がある人はぜひ試してみたい。もちろん、メールをPOPサーバーに残す設定はできるので、これまでのメール環境を崩すことなくテストすることができる。

(編集部)

## 試用レポート

### ① グループ向けの便利な機能

インストールも簡単な。サーバー名やアカウントの設定は通常どおりに行う。このあたりは既存のソフトと比べても、特に難しいとは感じない。前述の抽出条件を設定する作業は、従来のメールソフトのフィルタリング設定とは勝手が異なり、むしろデータベースソフトでの設定に近いだろう。

++Mailの特徴でもある「裏議、回覧、一発返信」は、オフィスでの利用で力を発揮する便利な機能だ。これは、裏議書や回覧文書をメールで流すときに、回覧する順番をメール作成者が設定できるものだ。受信者がメールの内容を承認する場合は、「承認ボタン」を押すだけで次の宛先を設定することなく送信でき、承認しない場合は作成者にそのメールが差し戻される。この機能を使うには、すべての人が++Mailを使っている必要があるが、「次は さんに転送してください」などと回覧順を書く必要もなく、相手の手を煩わせなくて回覧メールを出

# 階層フォルダー&シングルデータベースをサポート クラリスメール2.0

## Check!

マルチアカウント&ニフティメールをサポート  
シングルデータベースでメールを保存  
フォルダーの階層化にも対応



開発元	クラリス株式会社
価格	6,900円
問い合わせ	03-5210-9022 (FAX)
動作環境	68030以上のマッキントッシュもしくはPowerマッキントッシュ。漢字Talk 7.5.1以降のシステム。2.8Mバイト (Powerマッキントッシュは4.5Mバイト以上のメモリー)
URL	<a href="http://www.claris.co.jp/">http://www.claris.co.jp/</a>

マッキントッシュユーザーにはおなじみの電子メールソフト「クラリスメール」がバージョンアップした。今回、11月にリリースされるクラリスメール2.0の評価版をテストする機会に恵まれたので、この新製品を一足早く紹介してみよう。なお、クラリスメール2.0はEudoraからのインポートをサポートしている。

シングルデータベースで処理が高速化  
クラリスメール2.0は、1.1同様にインターネットとニフティサーブの電子メールをサポートしているので、アクセスポイントなどの設定をしておけば、ニフティのメールもインターネットメールと同じように送受信できる。複数アカウントもサポートしているので、メールアドレスを複数持っていても1つのメールソフトで管理できる。また、前バージョンで不評だったメッセージごとに別ファイルとして保存するメール管理については、2.0ではシングルデータベース方式を採用した。メールを1つのデータベースで保存することで、ソートや検索のスピードが向上した。

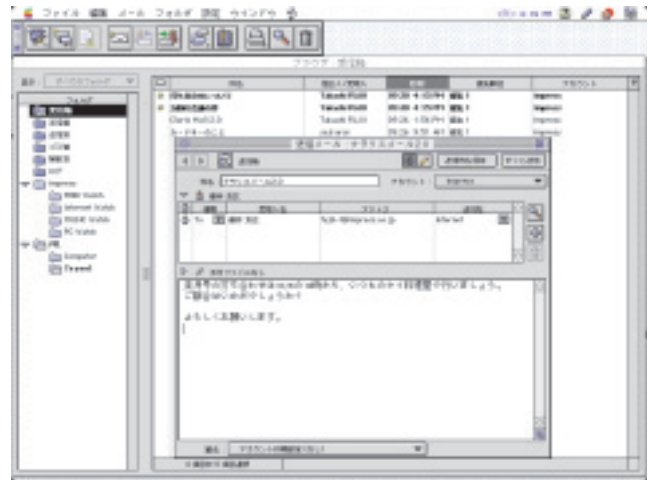
## 試用レポート

① オートコンプリート機能をサポート  
インストールから設定までは簡単だ。Internet Configに対応しているので、Internet Configに登録されている設定をし直す必要はない。基本操作画面は、「ブラウザ」と呼ばれるフォルダリストと、各機能のボタンが表示される「ツールバー」からなる。新規メールを作成する際に、相手が登録してある場合は「受取人」の欄に名前の一部を入力すれば自動的に残りの名前が挿入されるオートコンプリート機能も備えている。

① フォルダを階層化して管理  
前バージョンでは対応していなかったフォルダの階層化は、使い込んでいくと重宝する機能だ。1つのメールソフトをしばらく使っているとメールのデータも増えるので、分かりやすく仕分けしておかないと、どのメールがどこにあるのか見失ってしまう。フォルダが階層化できると、ジャンルごとにフォルダをまとめることもできるようになる。見た目にもすっきりする。

クラリスメール2.0は、メールの送受信のスケジュールが設定できるので、アカウントごとに必要な曜日や時間にインターネットに接続してメールの送受信ができる。この機能を使うには、コンピュータ、モデム(TAやルーター)の電源をオンにして、クラリスメールを起動しておく必要があるが、「時の分」や「分ごと」など、接続についてきめ細かい設定ができるので、寝ている間にメールをダウンロードして、書いたメールも寝てから送信するといったことが可能だ。

ファイルの添付は、BinHex、Base64、UUencodeの中から選択した方式でエンコードされる。送信メール画面にある「ファイル圧縮」ボタンにチェックしておくと、Stuffitを使ってファイル圧縮が行われるが、送信相手がStuffit解凍ツールを持っていないと解凍できない。相手がウィンドウズの場合などは注意が必要だ。



プレビュー画面が欲しかった気もするが、インターフェイスは分かりやすく、操作にもすぐ慣れる。

① 入門者からヘビーユーザーまで  
ダウンロードするメールの最大容量が設定できるので、オフィスのメールを家からチェックする場合などに長いメールはダウンロードしないようにすれば、接続時間を短縮することができる。その際、ダウンロードしなかったメールも差出人やタイトルなどの情報は表示されるので、あとですべてダウンロードしたり、サーバーから削除したりすることもできる。

クラリスメール2.0は、インターフェイスも分かりやすく、操作も簡単なので初心者でも難しいことはないだろう。また、フィルタリングやスケジュールの充実した機能は、ヘビーユーザーでも十分使用できるはずだ。初心者には入りやすく、上級者にも実用的な機能を備えたクラリスメール2.0は、幅広いユーザー層にアピールしそうだ。前述したが、このレビューは評価版で行っているため、製品版では仕様の変更があるかもしれないことを、最後に付け加えておく。

(編集部)



開発元	日本電気株式会社 (NEC)
価格	7,800 円
問い合わせ	0120-60-9821
動作環境	ウィンドウズ95 / NTワークステーション4.0が動作する486SX (25MHz) 以上を搭載したマシン。16Mバイト(NTの場合は24M)以上のメモリー、インストール時25Mバイト以上のハードディスク空き容量、動作時10Mバイト以上のハードディスク空き容量が必要

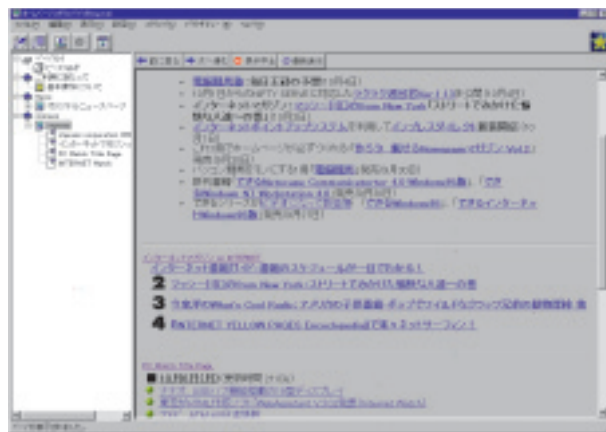
URL <http://www.psinfo.nec.co.jp/scbook/>

ウェブページの必要な部分だけ整理 / 保存できる

# ホームページスクラップブック Ver.1.0

**Check!**

ページの見たい部分だけ自由に編集できる  
自動巡回機能があればより便利か



複数のウェブページの中から、必要な部分だけをまとめる。「更新」ボタンで内容の一元更新ができる。

ホームページスクラップブックは、WWWブラウザで閲覧するホームページを切り取って保存するソフト。新聞の記事を切り取ってスクラップブックに貼り付けて整理するように、ネットサーフィンで見つけた気になるページを切り取って整理するソフトだ。

Javaやムービーなどもそのまま保存

このソフトが優れているのは、編集したい部分の情報がそのままの形式で保存されることだ。単に、「そこにあるテキスト」や「そこにある画像」を貼り付けているのではなく、「ウェブページのその部分の情報」として保存され、HTMLでのレイアウトも貼り付けられた静止画像、ムービー、Javaアプレット、ActiveXコントロール、ショックウェブのデータもそのまま記録される。例えば、いくつかのニュースページのヘッドラインニュース部分をまとめたページを1つ作っておけば、そのページを見るたびに更新された情報をまとめて見ることができる。

## 試用レポート

### ① 見たい部分だけを選択できる

ホームページスクラップブックを起動するとエクスプローラのような画面が現れる。画面の左側に階層構造を示すツリービュー、右側にスクラップされている内容を示すブラウザビューがあり、上部にメニュー、操作を指示するアイコンが並んだツールバーが配置されている。

ホームページスクラップブックは、WWWブラウザに表示されたページの保存したい箇所を選択してスクラップブックに貼り付けることができる。保存単位はページ全体がカーソルで指定した箇所（これをスクラップピースと呼ぶ）になる。整理しやすいようにブックスクラップページスクラップピースの階層構造になっている。ページ全体を保存すると、新しいスクラップページの1つとして作成される。スクラップピースは、1つのスクラップページに複数貼り付けることができる。ブックは複数のページから構成される、といった具合になる。この状況が、ツリービューに表示され、構成を操作できるようにになっている。

### ② ページを切ったり貼ったりするだけで編集できる

使い方は簡単で、スクラップピースとして部分的に保存したいときは、WWWブラウザで保存箇所を選択してホームページスクラップブックで貼り付けたいページを選んでから、「指定範囲をスクラップ」ボタンをクリックするだけだ。ページ全体のときは、WWWブラウザで保存ページを表示させてから、ホームページスクラップブックに戻って、「全体スクラップ」ボタンをクリックする。保存したデータは順序を変えたり整理したりすることができる。そして、ページごとに情報を更新することもできる。切り取ったホームページにアクセスし、最新の内容に書き換えさせる便利な機能である。

### ③ よく見る複数のページを1ページにまとめて見られる

ブッシュテクノロジーを使った購読機能も、所詮は情報提供側が玉石織り交ぜたコンテンツとして提供する。その中から、必要な部分だけを選び抜いてスクラップできるのだから、自分にとって最適な情報収集ができるかもしれない。操作は至って簡単なので、あれもこれもとスクラップするうちにページがどんどん増えていき、どこに何をスクラップしたのかが分からなくなってくる。検索したり、しおりを差し込んだりする機能も欲しかった。なかなか使えるソフトであるだけに、あれこれと注文を付けたくなくなってしまう。ほかに似た機能を備えた製品がなく、ユニークな製品で、ホームページに掲載されている情報をすぐに保存しておきたいときに便利だ。ウェブの情報を活用している人ならぜひ使ってみてほしい。なお、10月下旬にバージョンアップされ、印刷機能などが加わるということだ。  
(菊地宏明)



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)